この原稿は2015年8月15日（土）読売新聞夕刊に掲載された広告をカラー化しています。

大切な人のために、今知っておきたい最新医療

―補助人工心臓と心臓移植―

もしも、大切な家族に臓器移植が必要になったら…。治る手段があれば、誰もが元気になるそのときを待ち望むでしょう。もしも、家族が突然脳死となってしまったら…。深い悲しみの中、どこかで一部が生き続けていることを心の支えにしたいと思うかも知れません。臓器移植は、人の命と善意を結ぶ医療です。救える命のために、今、私たちができることは、現状を正しく理解し、もしものときを想像し、考え、今の気持ちをきちんと記入して、大切な家族と分かち合っておくことです。

（日本臓器移植ネットワーク事業推進部長 雁瀬美佐さんからのメッセージ）

心臓移植市民公開講座 実行委員会 委員長
磯部 光章（いそべ・みつあき）
日本循環器学会心臓移植委員会委員長
日本心不全学会理事長
東京医科歯科大学大学院循環制御内科学教授

「ひとつの命」を分かち合う意識、大切に

皆さんは、「命がどこから来たのか」について考えたことがありますか？　命は自分が努力して手に入れることができるものではありません。命は、私たちの父親と母親から受け継いだもの、つまり人から人へと受け継いでいくもので、世の中全体でひとつの命を分かち合っていると考えることもできます。心臓移植は、亡くなった方の大切な心臓を受け継ぎ、生きるためには心臓移植を受けるしかない重い心臓病の患者さんのもとに、新しい命を届ける医療です。

心臓移植市民公開講座を通して、医療関係者や患者さんによる移植医療体験などのお話をすることで、多くの一般市民が、臓器を提供してくださるドナーの方の存在によって始まる移植医療について正しくご理解いただき、その結果として日本国内のドナーの方の数が増え、心臓移植をはじめとする移植医療が発展することを願っています。

東京女子医科大学大学院　重症心不全制御学
同 東医療センター 心臓血管診療部（内科）教授
布田 伸一（ぬのだ・しんいち）

意思表示について考えるきっかけに

心臓移植市民公開講座は、心臓の病気と心臓移植について、皆さんに考えていただくために開催しています。心臓移植は世界で年に4500例以上行われています。日本では改正臓器移植法が2010年に施行され、欧米のシステムに近づき、心臓移植数は増加傾向にありますが、心臓移植を希望する人が400人以上も待機しているのに対して、実際に行われる移植は年に40例にも満たない状態です。その結果、重症の心臓病患者さんが移植を待つ期間は3年の長きに達しているのです。

日本では臓器移植や意思表示への関心がまだまだ低い状態です。この市民公開講座の内容をご覧いただくことで、皆さん自身が臓器移植について、どう行動するかについて考えるきっかけにしてください。

東京大学大学院医学研究科心臓外科教授
小野 稔（おの・みのる）

復職・復学して心臓移植を待機が可能に

植込み型補助人工心臓は、病気で十分に血液を送り出せなくなった心臓を補助するために、ポンプを体内に植込んで、血液を全身に送る装置です。人工心臓といっても、患者さんの心臓はそのままの状態で残し、弱まっている自分の心臓のポンプ機能をサポートするための装置（ポンプ）を体内に植込むという方法です。ポンプからは電源とコンピュータ制御するための1本のケーブルが体外に出ており、外部のコントローラに接続されます。

植込み型補助人工心臓の登場は、重い心不全のために長い入院生活を余儀なくされる患者さんへの大きな光明を与え、2011年4月以降4年間で352人がこの治療を受けてきました。この治療を受けた患者さんの多くは、職場へ復帰し、学校へ通学し、あるいは主婦として家事をこなせるまでに回復して心臓移植を待機しています。

善意から始まる移植医療～心臓移植で救われ、輝く命…

臓器提供者は慢性的に不足

臓器移植とは、重い病気などで臓器の機能が低下し、移植でしか治療できない患者と、死後に臓器を提供してもいいという方（ドナー）を結ぶ医療。善意による臓器の提供がなければ成り立たない医療だ。

2015年7月25日に、はまぎんホール（神奈川県横浜市西区）で開催された市民公開講座『大切な人のために、今知っておきたい最新医療～補助人工心臓と心臓移植』は、心臓を動かす心筋が破壊され、血液を循環させるポンプ機能が低下し、全身に血液が送り出せない心不全にまで陥ってしまう「拡張型心筋症」などの「最終手段」として行われる心臓移植がテーマ。

心臓移植は、心臓を提供してくれるドナーがいなければ手術は成立しない。心臓移植を希望する患者は今年6月末現在412人、これに対し昨年1年間に行われた心臓移植手術は37件に留まり、患者は平均約3年も移植手術を待つことになる。

そこで待機中もなるべく、行動を制限されず、仕事をしたり学校に通ったりできるようにと開発されたのが植込型補助人工心臓だ。2011年4月から健康保険で使用できるようになり、植込み手術を受ける患者数が増えている。

市民公開講座では心臓移植の現状と補助人工心臓に関して、医療関係者と治療を受けた患者たちが集まり、それぞれの経験を語り合った。

移植手術を受けた7月25日は小林未央さん（写真右）の第2の誕生日

ドナーの方のためにも大切に生きる

第1部の基調講演では、東京医科歯科大学教授で日本循環器学会心臓移植委員会委員長の磯部光章（いそべ・みつあき）さんが「心臓移植は、亡くなった方の大切な心臓を受け継ぎ、重い心臓病の患者さんのもとに、新しい命を届ける医療。臓器を提供してくださるドナーの方の存在によって始まる移植医療であることをご理解いただきたい」とメッセージを述べた。

その後、「心臓移植を受けた私の第2の誕生日」というテーマで、心臓移植体験者の貴重な話を聞いた。その一人である加藤伸（かとう・のぼる）さんは「心臓移植を受けた直後に、自分の体の中でドナーの方の心臓が力強く動いているのを感じて、受け継いだ命を大切に生きようと決心しました」と当時の心境を語った。

ちょうど24年前の7月25日（市民公開講座と同日）に、アメリカで移植手術を受けた小林未央（こばやし・みお）さんには、公益社団法人日本臓器移植ネットワークのマスコット「ハーティー」から花束が贈呈され、来場者とともに第2の誕生日を祝った。

さらに移植後に結婚して念願の娘さんが生まれた宮城亮（みやぎ・あきら）さんが「自分の命が娘につながったことはドナーの方なしには実現できなかったこと。今は娘の成長を毎日見守るのが何よりの幸せ」と愛娘を抱きしめながら語った。

東京女子医大で、長年、心臓移植に携っている布田伸一（ぬのだ・しんいち）さんが登壇し、「心臓移植を待つ苦しく不安な日々も笑顔で乗り越え、移植手術を受けた後は、ドナーの方の分までがんばって生きると決意する姿を見るたびに、患者さんから多くのことを学んでいます。意思表示が一人でも増えて、救われる命が多くなることに期待しています」と語った。

補助人工心臓を付けた患者さん（写真中央）の状態を説明する医師とコーディネーター

運転免許証の裏に意思表示したエピソードを語る武藤寛さん（写真左）と総合司会の雁瀬美佐さん

移植待機患者を支える補助人工心臓

第2部では補助人工心臓の役割と家族の支えについて、東京大学教授で補助人工心臓手術を行う心臓外科医の小野稔（おの・みのる）さんが、「補助人工心臓が心臓移植手術を受けるまでの『橋渡し』として患者さんの快適な生活を支えていることや、今年8月から小児の補助人工心臓も保険で使えるようになったことで、移植を待機できる患者さんが増えました」と説明。

さらに植込型補助人工心臓を装着している患者が登壇し、補助人工心臓によって職場復帰や学校に復学できた喜びの一方で、植込型補助人工心臓のバッテリーやコントローラが、合計10㌔㌘になる場合もあり、重たい荷物を持って通勤、通学する苦労についても話し、「街でこんなバッグを抱えて歩く人を見かけたら、『もしかしたら補助人工心臓を装着しているのかな？』などと少しでもいいので関心を持ってください」と訴えた。

コーディネーターや家族の支えが必須

また補助人工心臓の手術後には、約6週間かけて移植コーディネーターが取り扱い方や、退院後の生活についての指導や訓練を行う。患者の家族が24時間体制で見守ることなどについて、東京女子医科大学の補助人工心臓コーディネーター山中源治（やまなか・もとはる）さんは「補助人工心臓を付けてからも機器の消毒を行い合併症を起こさないように管理し、患者さん自身の体調管理も行う必要があり、長期間、心臓移植を待ち続けるためには、家族の理解と支えが不可欠です」と述べた。さらに東京大学医学部附属病院臓器移植医療部のレシピエントコーディネーター遠藤美代子（えんどう・みよこ）さんは、「補助人工心臓を装着しながら、長期間、移植手術を待ち続ける患者さんは、当初の期待感が薄れて徐々に『移植手術が受けられないかもしれない』という不安を感じたり、痛みや体調悪化で気が滅入ってしまうこともあるので、ご家族とともに患者さんの心のケアを行います」と説明した。

自分の臓器で命が救えるのならぜひ

第3部では「今、私たちにできること」というテーマで、市民公開講座全体の進行役を務めた日本臓器移植ネットワークの雁瀬美佐（がんせ・みさ）さんが、この日の特別ゲストで舞台俳優の武藤寛（むとう・かん）さんと対談。

武藤さんは「免許証の更新時に、裏側に臓器提供に関する意思表示欄があることを知り、『自分の臓器で誰かの命が救えるのならぜひ使ってほしい』と思い、自分の意思を表示しました」と意思表示に至るまでの経緯を説明。劇団四季で長年活躍した演技力と歌唱力で、この夏は第二次世界大戦後のシベリアの捕虜収容所で懸命に生きた日本人の姿を描いた音楽劇『君よ生きて』に出演中。「苦難を克服した先祖たちから受け継いだ『命のバトン』がテーマ。心臓移植を体験した皆さんの話を活かして演じようと思います」と語った。

臓器提供の意思表示方法は？

大切な人の命を救う移植医療のため、私たちにできることのひとつとして、臓器提供の意思表示がある。臓器提供の意思表示の方法は3つ。

1 インターネット

日本臓器移植ネットワークの臓器提供意思登録サイトで、国内での死後の臓器提供に関する意思が登録できる。
詳しくは http://www.jotnw.or.jpへ。

2 健康保険証・運転免許証の意思表示欄

運転免許証や健康保険証の裏面に臓器提供に関する意思表示欄が設けられている。

3 臓器提供意思表示カード

臓器提供の意思表示を記入できるリーフレットが全国で設置配布されている。

心臓移植体験者からのメッセージ

受け継いだ心臓、その鼓動の力強さに新しい命を感じた

加藤 伸（かとう・のぼる）さん

20代後半のときに息苦しさと咳き込みで異変を感じ病院に行くと緊急入院となり、検査の結果「拡張型心筋症」と診断されました。しかも心臓移植しか根本治療がないと告知されたとき、ちょうど仕事にも慣れ、育ててくれた両親に恩返しして、結婚して間もない妻と人生を楽しもうと思っていた矢先だったこともあり、大変ショックでした。とうとう「あと1週間の命の保証もできない」と宣告されたときに、補助人工心臓を付けて、心臓移植のチャンスを待つことにしました。3年待って移植手術を受けた後、最初に感じたのは、ドナーから受け継いだ「心臓の強さ」でした。自分の体の中で「力強く鼓動しているドナーの心臓」を感じることができ、自分は素晴らしい命を受け継がせてもらったという喜びと勇気を授かったのです。

7歳で渡米して心臓移植した病院へ還暦祝いの両親と恩返しの旅

小林 未央（こばやし・みお）さん

24年前の7月25日は、私の第2の誕生日、つまり心臓移植を受けてドナーの心臓が、私の命を救ってくれた日です。私は小学校1年生のときに「拡張型心筋症」と診断され、どんどん病状が悪化して、寝たきりの絶望的な日々が続き、最終的にはアメリカに行って心臓移植を受けるしか方法がないと宣告を受けました。そして両親の支えや親身になってアメリカの病院と連絡を取ってくれた東京女子医大の布田先生のおかげで、アメリカで移植手術を受けることができました。

移植手術後は何度か大きな拒絶反応に苦しめられましたが、それを乗り越えて帰国し、その後は無事に小中高校を卒業し、大学に進学。成人式を迎え、就職して、そして両親の還暦祝いに、私が移植手術を受けたアメリカの病院を再び訪問することができました。

心臓移植を経て娘が誕生 ドナー家族の強い絆を守り続ける

宮城 亮（みやぎ・あきら）さん

1993年春、拡張型心筋症と診断されて、2年後にアメリカの病院で移植手術を受けました。手術前に「術後の生存率は70～80%だから大丈夫」といろいろな人に励まされても、自分の頭の中では「20～30%のケースになってしまわないか」という不安で眠れない日々が続きました。幸いなことにそれから順調に健康を回復することができ、結婚し、娘も誕生しました。

移植手術後にドナーのご家族からお手紙をもらい、「私たちは強い絆で結ばれた家族でした」と書かれていました。私はこれからもずっと、ドナーとそのご家族の強い絆を守り続けていきます。

■主催／一般社団法人日本循環器学会・一般社団法人日本心不全学会　■共催／一般社団法人日本移植学会・特定非営利活動法人日本胸部外科学会、日本循環器看護学会・特定非営利活動法人日本小児循環器学会、特定非営利活動法人日本心臓血管外科学会・日本心臓病学会、日本心臓移植研究会
■後援／厚生労働省・公益社団法人日本医師会・公益社団法人日本薬剤師会・公益社団法人神奈川県医師会、公益財団法人日本心臓財団・公益社団法人日本臓器移植ネットワーク、厚生労働省難治性疾患政策研究事業「特発性心筋症に関する調査研究」班
■特別協賛／株式会社サンメディカル技術研究所　■協賛／ニプロ株式会社